十勝毎日新聞
発行所
十勝毎日新聞社
〒080 帯広市東1条南8丁目
電話＝編集㉒2121、広告㉓2323、総務・販売㉓2222
©十勝毎日新聞社 1988

国際宇宙シンポから ㊤

特別セッション 基調講演
評論家 立花　隆氏

長期的効果は有望
ポストHII 必ず射場誘致できる

第十六回宇宙技術および科学の国際シンポジウム（ISTS）の特別セッションが二十七日、札幌市内の京王プラザホテルで開かれた。テーマは「宇宙時代における地域開発」。将来の宇宙センターの中核となる大樹町を中心とする十勝にとって興味深い内容だけに、評論家、立花隆氏の基調講演と、一橋大教授、中川学氏をコーディネーター役、米ヒューストン大クリアレイク校学長、トーマス・ストファー氏、仏CEIS取締役、アンドレ・モーレル氏、スウェーデン宇宙公社エスレンジ研究所長、アーネ・ヘルガー氏、道副知事、我孫子隆一氏、立花氏の五氏をパネリストとするパネルディスカッションを再録してみた。

◇

私は宇宙ファン、北海道ファンの一人として、思うところを申し上げたい。道の委託を受けた開発計画研究所のつくった北海道航空宇宙産業基地構想のリポートを読んだが、これだけ夢のあるリポートは珍しい。夢は主体性を持って実行すれば実現する。そうなれば全く新しいパターンの見事な例になるだろう。成功を願うわけではありますが、具体的にこの夢を検討していくと、かなり問題もある。それは現実にこの構想を推し進めても、短期的には経済効果がほとんど見込めない。

ラーメン2杯分

業と同じくらい。ダンボール産業だと一兆四千億円でその十倍、自動車産業だと十四兆円で百倍だ。宇宙産業というとイメージは膨らむが、実態はその程度。トータルでそれだから、実際に北海道に落ちるとなると、さらに小さくなる。

しかし、このままでいいのかというと決してそうではない。最先端技術の集積・宇宙にどれだけ投資するか、将来自の宇宙基地、往還システム（運）からみて、限界がくるからだ。岩手県の遠野が候補地として名乗りを上げているが、海岸に面していない欠点がある。ポストHIIの時代になると、発射場の候補地は北海道以外にはなく、ポストHII通コストさえ安くすれば居住環境がいいので生産性に役立つ。

ハイテクの芽育て

こうした現在持っているハイテクの芽を育て、大きくすることで宇宙産業も魅力を感じてくるのでないか。

ハードのロケット基地を目指すだけでなく、北大に宇宙工学の大学院をつくるなど、基本は人間にあることを忘れないでほしい。

また地域開発だけでなく、日本の将来にとって宇宙開発が必要との観点で政府などに働きかけてほしい。

（つづく）

まず情報蓄積を

しかし、長期的にみればどうかーというとかなり望みは出てくる。何といっても広大な土地があるからだ。HIIロケット（六十七年打ち上げ予定）以降のポストHIIになると、今の種子島では保安距離、年間の打ち上げ制限（漁業補三セクターで通信衛星を利用するなどして激減することができる。そうなると北海道が持っている別のメリットが生きてくる。東京は人間が住むには劣悪な環境にある。ソフト技術者にとっては通信、交環境がいいので生産性に役立つ。

日本の経済力、技術力に響いてくるからだ。

昨年二十一世紀のビジョン、長期政策懇談会の報告が出された。それには日本も独

誘致できるだろう。

ただそれまでのつなぎをどうやるかが問題。小型ロケットの打ち上げ設備をつくるだけでは足りない。リポートでは宇宙生命科学研究所をつくってはと提唱している。これはいい線をいっていると思う。ただ、情報は人間と人間の接触で得られる情報が最も大切。その点、道内の先端企業が道内でなく、道外に情報を求めている現状からみて、北海道に研究所を置くことに二の足を踏む。

日本は交通と通信費が高い。だが、これは北海道が第